



繪本小栗外傳

三篇

壹

第千七百
 小栗外傳
 京都深町通御池南
 神明閣
 神戶氏貸本之記

~ 13
 3249
 4



門 13
號 3249
卷 4

神戶藏書記

善戲謔兮不
為虐兮

絳山先生編述寒燈夜話十五卷書肆分為

三帙至此編乞序辭於我我熟思先生之戲
編主勸懲故以淇奧詩言換序辭而已
文化甲戌孟春 米花散人麓堂題

十九年八月廿七日調查

十九年八月廿七日調查

十九年九月十三日調查

十九年十一月廿八日調查

十九年十一月廿八日調查

十九年十一月廿八日調查

十九年八月廿二日調查

十一月二十四日



大勢 入道 息女 月夜



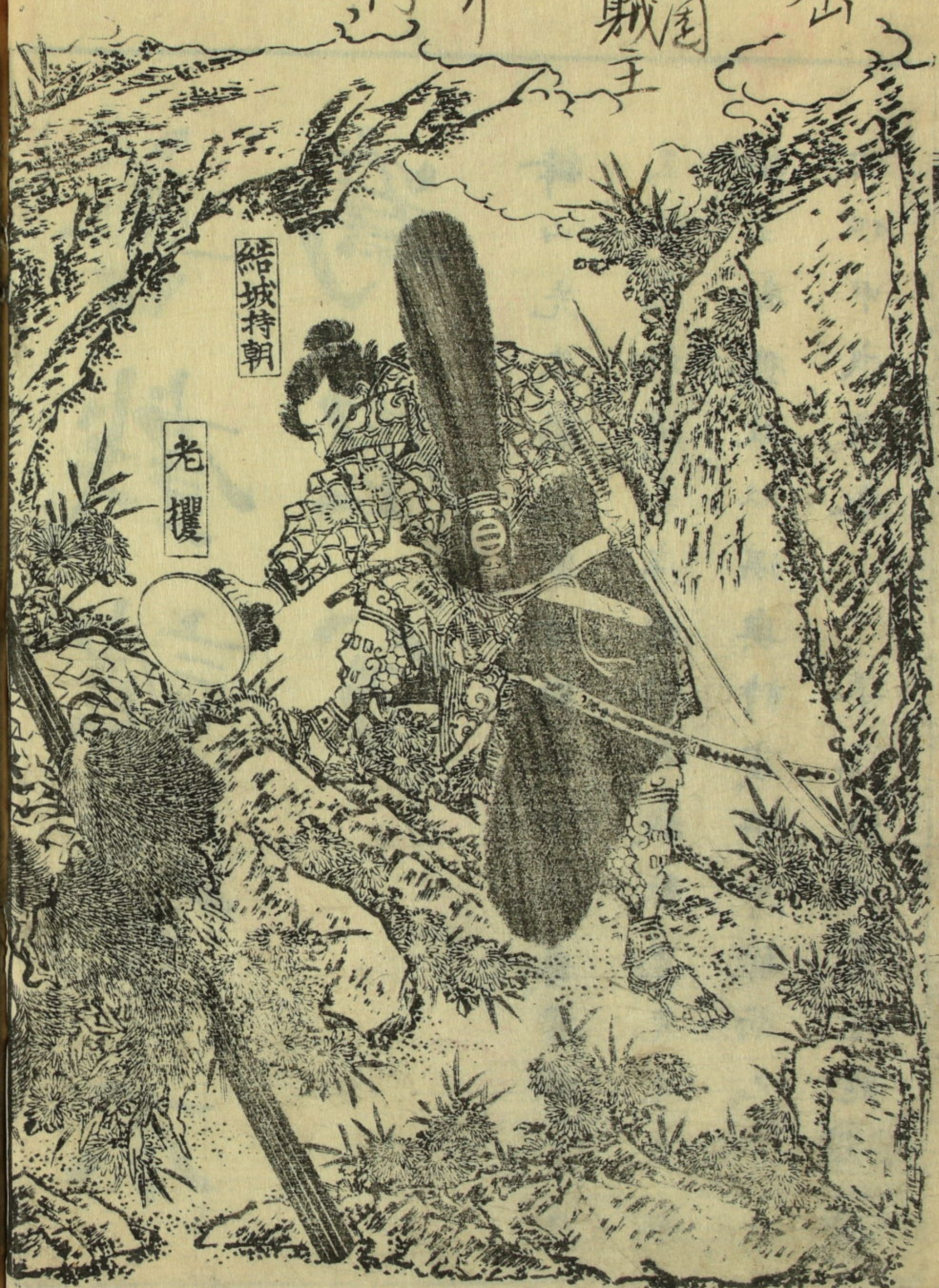
白糸姫

鬼門

稲多左衛門

高家園 賊主

筒戸山



結城持朝

老櫻



一色詮秀

賊婦



常阿土人

横山安秀

小栗卷之一

書肆叟星岡草廬より来。曰峰山先生所著寒燈夜話初編二編既
後見し世行と。弟三編刻既成ぬ二編中。長兄初編此要を摘て出
讀者の助よとせ。今此三編と二編此要と抜抄しととふ其需道理の
再び拙筆を走らすと左れ如し。

照天姫瀬戸橋より身と投りけ折る。人買小四郎が舟小こら入水せられど
既氣絶るぬ小四郎も是名武の臣るが。姫を知らず保して蘇生に
其身以上を同く。姫の藤浪が毒惡く懲る。実事を述べ。其時と小夜
ひ人買来り。姫買りて去ぬ其跡小女来姫乃去向小四郎。此時小四郎
姫へま君ると云。夫先水と安小夜より得し身價と小女よまて自殺せり。小女
兄の遺念とほき。身價の金を首にかけ六部より。姫は去向尋る。さて照天の小
夜は。美濃国青墓の宿方長がり。又賣渡りて女とる。ま固辞す。嬰女

とわり。千辛万苦とす。不_レ必_レ支助重方長が許_レ来り。夜賊の爲_レ其_レ身棄_レり。途_レ小_レ美登小太郎は救り。三州二村山に忍びきり。小栗助重の前小二村山は忍びあり
一が。美濃に金生山虚空藏より。折る。万長が女児花見悪漢ふせ。難美なる
を救ひ。花見懸恋せ。二村山小夜と成得る。万長がりに居り。さて万長照天姫二
村山に居る。其家長万平と云。其當時美登小女と云。あて兄は送金と
り。姫乃身と贖ひ度。其后照天小女小太郎の三人は美濃に忍び。小栗助重は
許小栗。花見其跡を慕ひ来。姉と争時万平忍び来。彼是争。万平は小太郎を
殺す。後ぬ花見は。妬と恋死す。其後小栗東国に下んと。箱根に
花見が怨霊の爲。熱湯の裡に落る。乘馬鬼駟を殺。其身湯傷。支體を傷。成
記せり。是渾勸懲とまやする物悟る。

禾花散人胤堂

壹卷 第十八編

鬼一崇れく助重悪瘡を發せ
警小逐れく照姫股肱を失ふ

同上 第十九編

千里小車を牽て仏助を祈る
一朝二病愈く神徳を能く

貳卷 第二十編

山鬼の魔術女児と編と
老僧の念珠怪獸と走と

同上 第二十一編

九傑遠慮良將と助く
三囊奇計妖擧と伏と

三卷 第二十二編

宿と破寺と投して山賊と殺と
途と草廬と牽と兩婦と入と

同上 第二十三編

壯夫郊外小草賊を討
孝婦白屋小美男と會

四卷 第二十四編

勇威龍と走して亡鏡と復と
仁惠士と憐と旧室と入と

同上 第二十五編

弱士發達して東国小赴く
痴差慙愧して仏門小入

五卷 第二十六編

怨家と討つて孝義と表と
佛堂と再建して因縁全と

通計九回

小栗外傳三編目次

寒燈 小栗外傳卷之十一

東都

絳山駝編

第十八編

鬼一崇とて助重悪瘡を發と
警小逐きて照姫股肱を失ふ

程さく彼二人の間の近くを依ぎ着る。小栗貫川も猶一重を其妻の
照天と郎黨の小女をわづらひ愕然として驚く。照天も小女も相ひつを
ことなれば、いふと奈何とぞ。うり果然たり。一盞茶付互に言詰る。顔え合し
居りしが、漸あつて小栗助重云。出をたぬ。わさ不安。妻も小女も今日只今こ
くもべと。いひま。さうく何等の故より。只二人あて。あまひ。そ我は運殺
這殺の。さやより。不圖。那と過失せりと。昨夜妖怪申連して。今朝。絳山
出會く。温泉の池中へ鬼評を牽入れ。執湯の。さあ馬と失ひ。その身入

爛腸く進退心のまうなうばらるるまで詳し物語は照天の姫も
 小女も驚愕嘆くとしど助重が命恙なれ心をとりてまゝ助保く
 さてりやう。教よ別して后身と謹む音信を俟く忍び付けし小長女児が
 死を嘆くのみならず我々死仇とありし遂に在家を窺ひ知り人数と俵に
 入りし折や小女東國より帰り居りし小女小吉郎の二人力とてして
 防ぐといども寡の衆に敵對さく死力をこめて切ぬけて辛く脱ぎて
 其附の終ふ小吉郎いづれやを去向なれど敵まて競かたれ彼
 搜索ん暇なく公女もあてをせし川を走らば立忍ぶ方もなく再び長
 女出余のいづる憂は遣人も知れ終はる殿の跡を慕ひ在國より
 見参して后鬼も屏もせんぞるめと俄に思ひまゝとるぐり付けし昨日
 三島の驛路にて夜沢寺なる行上人の行遭もじし上人の宣を

よバ 昨夜祝音の報告あり小栗助重万長が女児の死霊のうめ小箱根山ゆく
 悩まされ不思議のこと失と察へ明日此地方を照天姫とてたれ彼彼教て
 助重が救ふとてとありしほど今朝より此所におきて候結り速に
 箱根山に往く救ひ多と上人の教をて取りのめりめを此所におきて
 とりのし小教を差つて殿に見参するの候はるりと語をききて小栗助重
 上人の教今よとてとて空しく感てさてやとて花見いふれ我々の
 怨みておんまが怨まは此の上人の宣するよりやと問はれむとよ
 取らむと事の不審なれ上人は向にその汝が肌を守る祝音の霊魂を
 究鬼威徳を怖して近きおと又とてあり助重毒湯に浸りしとて
 悉く悪業となり昔の容貌さうぞ爾れ能野本宮なる温泉湯
 せの速に平愈して故に復すとてあれ湯毒の所なれば名譽の湯

少くはく愈むるに示教し、人々の罪をばに、
此れの人とて、このくち、小栗、常陸、沈思、上人の宜く、
けれど、仇討の爲に、と、此地方まで、
敵を、後、討つ、と、く、く、
た、人、此、身、は、け、腸、を、て、命、を、落、し、も、余、の、
こ、も、取、り、し、と、背、を、き、め、め、め、め、
昔、ゆ、り、常、陸、へ、は、ひ、し、も、
前、を、く、人、家、を、出、く、小、栗、を、休、
め、の、く、れ、を、戈、角、と、し、
か、き、く、と、常、陸、の、國、へ、と、

○箱根山毒湯あり、
硫黄の氣、
瓶とかり、
わ、び、那、須、母、を、温、泉、の、
な、り、と、れ、を、り、て、殺、し、
あ、ま、が、り、け、り、毒、石、と、
水、の、毒、
同、話、休、
あ、ま、が、さ、し、か、
腐、れ、破、
易、

鄙がわがさるべし醫師の病を治しても怠る程に照天姫を何程に
 祝音の由吉の車を故きるといとははら想ひながら重た病に悩める
 夫も凍してせむと痛ましく病をまじけ仲人あつたとき夜更けの
 なく祝音に祈誓と病のあつてん奉念ぐれば斯くは所一色津奈
 這回下総國まで正領恩賜ありく先願國やアと先宛の光景地理
 の要害とえむと徳念ぐの人へおげ下總お赴くとは俄に大家と
 かりけるやどに従者不足ありしく密に後山を頼むはまの法盜者
 を雇ひて従者の教を満ちり横山安秀豫く詮秀お縮へがその方も
 従者の中に加りやじが今日此地方とこは午の貝くはるる飯
 せんと小栗が宿じ旅店ともあつて詮秀主従立入るは徳念殿の寝臣
 かんが家とといふまでもなく此羅路の保山を人と奔走く教行り

横山安秀此村所より何とんと庭よりと前載と流し以行り離さるに
 真よ人の怒める声のあつたが不審はく小柴垣に伸てはし祝く當所
 照天の束の水を汲んと障子に開け立ち出る中開く横山安秀と面合せ
 愕然と安秀豫く捜索する照天姫を目前お見えりては母あつたが
 兎角の事を顔とむらかりかろておま投へ恩は背れ不義よ走る婦人の白痴よ
 今投へ往く世に去りし汝が両親の光の夫婦代へ庭訓せんのことよ
 よと牽き走る照天姫は此年以世念と想ふ父の仇も達するはさうお期をうら
 てまごめまはてたかれば怒日ひ十か「豫く肌をを放まは短刀拵て逆ま
 め拵捉へ腕をうひ押ひ声を励まきりたれは母の甲へ母上の兄を殺し
 ありおがくこと一應永七年の秋父上名武篤光と相持川にて非業もあ失ひ
 るまはつたあつたやと奴家親子と知るまじと思つて欺れた人もは耐父や

随ひ。下僕の道助を甲と誦り果せて主連が主の撲死をうとうとせんとす。
生存命し大恥として生歸り故郷に忍びて叔家が家の断絶と使へばとす。
後悔し父の撲死の光景を叔家告げんとおりの多行非行を尋ねたる。
忠義の信届をせよおんが為お捉へられ彼鬼研小食手せんと襲ふれ居じ
折らばに夫の小栗母還會名をわめて細やう父の撲死をせよおまきその名
秋の草花をよおく白雲路と流ともに消へくともかく放捨れりば追女が
流跡をよめて懐きと知る叔父君父の仇を免さばし怨みの又受て入人と
おくる短刀突くれば我をせよと身をかじとやも又振り放ら膝下
お入嘲笑ひ悪く想へ今日まで公を改められ我子の射婦よせよ
や。とひくとも我をりて仇と狙ふ生おられ死く其原は行なうら今
のうを父おひく。父と母とを結ぶ。汝が云は差はひさく馬光とておまほ

か。相摸川にて殺し。その何故といふなれば。應永七年の三春中旬の
花の比名武が園の花えんと小栗親子をまかす。射池の鳴鶴を某と助重
として射より射の運れ挫きて不足とする。光の我を甲斐なりのこと。
えをとりめはくろくふ。まご類髪の助市が又な紅人と笑ふ。まご三條ふ
女婿の云約米親を疎く。化人を睦ひく我を恥じ世は嘲哂をさし
く。おのうよ。合はあ。ばや斯く恨そのあねをこそ相摸川に欺き
連れ。彼水底に沈まして。日比のサ念六暗けり。其後名武の正領を奈
我りのよせんと謀り。汝我命を耻として。徳念殿の心おまき。おかりりし
助重と走り。おの急おひ。弁我望を妨り。そののみか。とるおん
我殺し。はることを知り。是彼のこまはき。汝は恨多かり。今速に斬
害し。我腹にんとお思へども。一事同き。あるふ包ま。と。倍く。は。且よ。

嶺山
遺



照天至從
武隆聖
の
旅客
の



川東卷之十一

命ごうりの助けもせん思ひおせが三年前汝が夫と思ひける小栗助を
 不圖も我家は漂泊するものなる。天の賜物此年以悪しとぞ人なるを
 討みんやと議りしが彼も些く武勇と知りぬ。ゆゑと猛攻を致さるる
 人敵と扱ざるのみならず討漏さんともやと毒酒をりて謀りし思ふ
 壺の差ひさくよも謀りしと思ひてこゝに此月の九日とぞんえ
 たり。我營生のその為よ部下どもと引具し箱根山よりし。我を行
 遭旅人の誰あるんといはせると鬼研の駒ふらち家なる小栗お
 ぼぶらもなし。甚怪しくも思ふらち間近く歩きたまはし。はや今世は
 亡魂のうも生しよのりとも憎しとぞ助を著くた。まはせまやこ
 下どもに下知をば討まんと退く。彼山中のありし地獄谷の
 逃失する。さてのみ今とてし。小栗のこの地獄は。我此地方をこゝに

恨と云へその為。幽魂現れ出る。思ひまじり。今日まじりも疑ひ
 さうお晴中じ。汝とさうりて助の身なる果の知り。つまじり
 げし。威しつ。滄しつ。同もの。照天姫の仇人。組あはせ。今
 ままの身の上を。怒の涙は。胸迫り。雪の。声
 出まはより。外れる。小女の。最前より。不審地。彼不
 尋ねて。此所へ。老人の。照天姫と組
 ちめて。雪の。居る。言詰を。横山。捉く。投
 姫を。助け。牽記。照天の。落せ。懐又。小使
 高く。寒は。小女。好く。今日。不意。横山。生念。は。父の
 仇討。せ。女子の。甲斐。力。及。返り。付。な。あ。と。と
 助け。れ。再生。され。仇人。討。入。助。太。カ。と。て。横山

孝公皇天の憐み多し不圖も今日汝母生余ぬ斯むる天の助あり多の
 加勢のれがとていそ脱くことやのる先非を悔くことよく此討刀を受
 よとて斬くかき部下をも隔りまき殺たり。亦母小女は武勇あり
 且も忠義母身を捨て必死まらうて働け目くらら母五六人枕と並べ
 討とりの此光景も人々恐怖とて近き所ぞ小女もあしく身を
 負うる。少裡も想ふやうめをて敵の横山之益益の人を殺さんより。彼を下
 太刀恨えんと四方を望ま向ひる。廳堂の掃まひえり。ある喜むし中
 一教も走り寄んとする。亦母さぞが主を討せんとて部下もあし隔力を
 ばくしてまき入り。小女焦燥進ひちじ楯の辺も迫りあり。主君の仇れ
 横山之今も思ひ知とあれと太刀よりよく切んとしとも危うきまきり
 かき障子の裡より突然と一条の糸をひきまきり。小女が胸かきまきり

急所の痛も小はしりの小女呼とのりけ中倒まきり。嗚呼憐れし忠臣此
 一箭のあかきも。此亦も命を墮せし。豈悼まはるの小女もや。生討障子と
 さと開き一色淫秀ゆくと弓箭たをまきゆるぎ出まね下郎の我勢
 ぞて。非業の死に做愚さまといと誇りまらうらうらうら安秀秀低平内
 相公の一箭のあかき小臣の命危うしに仁惠を垂まらうらうら。天の
 恩を謝され最前よりの光景を障子の行を粗々ぬ。小女は既に討苗
 たり。照天を早く緋さる。小栗が生死を拘問われと云。安秀秀実雨のまきり
 走りのまじいぞ追著て生捕んと部下をも討候し。照天が跡を遠く入り
 こも照天姫ハ小女が跡まらし。夫助手を助けて馬を牽。その身自ら
 馬を牽下総の方を走りしが。名世おひは武義世のゆけども秋乃
 果をなると古人も限りなく。まきり流るる。眺まらうて人家とてハ

りの行對し何れも人説法。衆惡の力なく。りと事一踏まれば。老傍中。て這行よす。りやよ夫婦の人よ。今日の危難。遭ふこと。佛の教。非ざる。怒野へ行。て。ら辺中。まひ。と云。をせ。く。照天姫。より仰。向。きて。て。め。れ。思。ひ。も。か。け。ぬ。夜。の。行。上。人。な。り。し。且。の。燈。火。の。限。なく。雪中の炭。闇。夜の。燈。火。に。く。ら。ま。る。婿。一。涙。七。前。づ。ら。ぬ。や。わ。つ。て。極。首。一。上。人。の。示。を。非。き。東。國。よ。く。は。し。こ。の。畏。れ。定。ま。深。き。故。め。り。て。下。総。さ。り。て。行。ん。じ。此。解。う。く。に。及。り。然。る。を。不。因。上。人。の。助。め。よ。り。て。脱。き。逃。れ。危。難。を。此。亦。免。れ。り。そ。も。く。誰。か。告。ぎ。し。今日。の。横。難。知。り。し。此。亦。お。も。て。大。急。を。毎。夫。婦。を。再。生。さ。し。ま。ひ。い。と。有。が。じ。と。む。れ。か。と。感。佩。と。れ。が。上。人。ら。ら。噴。嚏。つ。ま。り。く。ら。の。は。身。の。佛。の。加。護。あり。て。一。回。さ。り。と。幾。回。救。ら。せ。る。も。そ。も。と。れ。今日。の。お。ん。が。の。

う。の。こ。も。又。観。音。の。告。め。よ。り。慌。忙。く。走。す。り。え。れ。が。佛。の。告。め。も。差。り。て。横。山。が。遠。き。り。し。小。出。合。へ。ん。と。れ。を。欺。き。還。り。し。り。助。を。と。の。本。意。に。そ。と。絶。え。り。助。を。か。ま。り。た。女。保。と。れ。が。漸。か。り。其。甲。斐。あり。て。懸。生。若。し。れ。息。の。間。より。し。て。上。人。と。て。涙。を。流。し。あ。智。を。智。の。元。夫。我。懐。の。素。懐。を。返。入。と。し。と。畏。く。も。仏。勅。を。非。り。ま。す。今日。に。及。ぶ。と。足。禪。佛。の。四。對。なり。その。罪。い。と。て。脱。し。の。ん。斯。惡。瘡。再。治。め。り。た。と。も。再。生。期。か。じ。世。も。う。ま。う。と。ぬ。も。せ。が。未。だ。の。悔。を。教。を。も。く。の。上。人。と。な。れ。ば。ら。惡。の。回。意。ら。り。一。回。仏。勅。を。非。く。と。し。と。か。く。先。非。を。悔。ふ。志。氣。を。改。む。と。大。急。の。冥。助。空。手。か。ん。や。日。あ。る。ま。で。本。復。せん。これ。より。志。野。山。本。宮。の。功。小。利。め。ん。と。や。ま。し。と。勅。し。る。助。重。涙。せ。き。め。ん。と。あ。る。有。る。や。此。上。の。教。へ。何。れ。怒。野。山。へ。也。山。か。り。て。本。宮。の。温。泉。を。浴。し。ま。め。と。俛。こ。う。人。は。一。と。や。



常阿



助重

照天

武藏の野
良人の
奇病と
嘆天照

川原卷之二

馬よりほを悩められ。此より遙けき妙路へ行べきことの難
 か。ちほくさるり。上へ歩付考へ。斯く病は長途の旅行おぼろ
 宜か。道は形が。圓通の覆庇ある人。お我まき。一の術のえは
 暫時こみ。ゆる久し。云は。何方に去らん。一盞茶所あつて。忽ち
 行車所。換す。り。夫婦。対ひ。さるり。これ。助を。さ。し。形。車。の。総。を。り。
 乞兒のま。し。て。行。入。今。小栗。と。の。容貌。を。熟。く。ん。る。瘦。瘠。湯。は。烟。を。り。
 を。さ。る。り。瘡。と。る。り。て。醜。く。彼。地。獄。の。写。し。終。る。人。は。餓。鬼。は。彷彿。と。り。
 姿。容。貌。の。形。さ。る。り。妻。り。果。れ。が。維。あり。て。小栗。夫婦。の。人。く。ら。り。人。を
 える。は。雨。う。り。途。中。て。雙。言。の。害。を。免。れ。ん。叔。母。と。姫。の。女。を。遙。り。
 旅。を。只。一。人。也。行。車。と。牽。る。る。艱。苦。の。事。を。思。ひ。お。れ。ん。力。を。お。ん。と。あ。ま。り。
 小栗。の。首。の。け。牽。り。多。く。自。ら。勞。を。休。む。よ。と。も。あ。ん。と。か。移。り。准。備。や

あ。り。る。一。箇。の。木。札。と。り。小栗。が。首。か。け。り。あり。照。天。と。れ。と。ら。ん。ふ
 有。因。再。生。翁。名。餓。鬼。阿。弥。下。回。牽。此。車。供。養。千。僧。同。と。は。字
 を。写。り。照。天。を。乞。を。精。深。く。因。縁。謝。し。て。お。上。人。の。徳。恩。の。り。忘。る。朗。や
 信。ん。あ。る。と。く。も。有。じ。と。感。森。の。涙。せ。き。め。を。伏。沈。ま。て。拜。り。と。り。
 小栗。も。と。り。感。佩。の。涙。袂。お。め。り。孫。錢。許。回。り。首。は。く。も。恩。を。謝。し。ふ
 たり。お。上。人。又。曰。さ。り。篤。く。謝。し。多。し。も。お。ん。と。妻。婦。と。貧。道。と。ら。ん。あ。き
 因。縁。わ。れ。が。と。一。回。う。り。再。三。回。大。意。大。悲。の。観。音。の。我。お。の。ご。仏。勅。り。て
 故。り。多。く。佛。恩。を。莫。大。な。れ。冥。助。の。ほ。を。あ。ひ。り。人。を。兼。思。り。る。一。ふ。り。七
 我。の。足。より。下。徳。や。常。陸。の。方。へ。立。越。え。彼。亦。思。ふ。十。人。の。郎。等。達。一。還。余
 お。ん。と。夫婦。の。光。景。より。小。介。が。死。亡。の。辨。り。り。く。火。詳。告。知。し。跡。より。慈。性
 赴。け。病。平。愈。の。付。を。結。宿。志。を。遂。は。し。と。袂。を。お。ち。て。上。人。を。下。徳

さしつかへなくしきまつて

第十九編

千里お車と牽けて佛助と祈る
一朝お病愈くと神徳を仰ぐ

且説小栗助平の老阿上人の教よほりし熊野お行乞ひはるる東海道
あつ憚ることも及ぶれば木下路瓜こも登りぬと助重を車と牽け照天姫の
形容瓜形の人外あり百家衣をまとい破れし笠も面瓜蔽陰し全く乞馬の
ゆびもあらぬゆ行車牽けりも今日おひらる旅衣木下路をさして行乞ひの
心の裡こそ憐れなれ過世いさるる作業めて幾許の夏瓜之芳村の里と旅弁
道柴をふみ久はしと扱扱をうち渡りけり行乞ふ生ずる人の助まをえんと
不審とてこそ首おかけりるおれを流さてお行乞上人の助けもなれ餓鬼お
こそこそ因縁のありはるるゆゆや車瓜牽けりて功徳もほき千俵入目耶

あつと人と旅人の争ひ牽かて名中も木曾れ岨道易くも打つて先徳路
よ入りふれば此國の赤坂岳井田系と万長が家も近なれば人処あらん
方こそふふ公認の噂もりのども三惠寺辺お止りて光景どうかひひと
然るも此國のりりお行乞上人道一人の餓鬼を女けぬらんとゆ行車お
らら牽けて熊野の温泉もせんとて此彈路をさしてゆり此車と牽け
りか一回牽けり千俵を供養するも怖しきと書付くも人お怖りは是と
言ふもさるるやらおれと人争ひ行乞も万長が許の娼婦をさして街へ
ゆをうちゆきて我們的罪障のいふおとるも助も縁と彼餓鬼病の小車
を牽か少しき功徳もなりゆとらんと請ひひく主の長も將徳の脈を
をひく打連ぶら三惠寺辺お出逢ゆよとあるお陰も餓鬼病の車と休めると
えら我こそ牽めと寄すゆりゆらゆら車と牽行の脈も響け感へとも止りゆ

術なくそふあそで車中添ひ行やとなく青墓の驛中もなれば今や
 万長ふん知多られ月の大のや及んと只顧圓通大菩薩のせん名
 唱へて思ふなく此西をさしきしむれと公は祈念はけるが公の眞助や加りらん
 此苗村ふる京都より鎌倉へへの使長が許し宿りもく六俄のいあて
 慌忙き車を牽き車中も娯妓も是の別をまげ渾そ許は還
 久照天の虎口を免れてもやも此西脱身入とゆきげど汗の垂井さ
 知くで公の察々系越は行くや我夫の病といつる醒井とせくは嫁し
 祥かればややうて平愈あふふ敵の首をも井中勇くしき名を宮
 のかともむと後のま容貌いさきよりて往入鏡山の月影も湖も
 映し曇りなれば父や舅の忠臣の信を君も父へあけ渡り者亡して明も
 法代よあそこの石山寺大慈大悲の心願をい空しくもく助きの枯る

似る身の病ひ愈はしむひ花咲る春に逢しむひ秘と伏拜まつ跡あは
 行けは京都もやろろ日ハ長年の伏見の里旅行人の思ふも涙の煙や
 いとろた秋の夜明く朝日影さても各もは群波津のむじなもろの橋
 眺く四天王寺を極首つ牽かきも小車のまらと客の和田の糸八十高
 かけて漕舟と海士の小舟の楫を断ちひおはは月の上れよりるさるふ
 旅枕さるの公のあはれさ思ひ和泉の信田なる本林の楠千枝よき
 物あをる古れ人も我ことあはきなれ憂世とろみ葛の里らる此西へ
 紀の國や和野の浦波うちあせて芦間の霞も夫ぬづれとろもそは
 似はれともころ夫もろ身の病かろあある涙こそ潮下に入らぬ神の
 乾く隙さへる旅の日数を預けは郷くとけ行車牽けとも慈母の藤扇
 息もなれ抑態野権現とももろ伊弉諾伊弉丹のともて神武帝れ

以附^{しつ}り。此^こ比^ひは^も無^む跡^じま^しく^て今^{いま}不^ふ朽^くの^い靈^{れい}場^{じやう}なり。爾^{しか}る^ふ本^{ほん}朝^{てう}諸^{しよ}神^{しん}の
 中^{ちゆう}に^た唯^{ただ}一^{いつ}と^し兩^{りゆう}部^ぶの^に二^にの^り唯^{ただ}一^{いつ}と^し之^{これ}は^は伊^い勢^{せい}自^じ王^{わう}太^{たい}神^{しん}の^でく^は經^{きやう}を^は心^{しん}に^して
 尼^にを^は禁^{きん}じ^し。渾^{こん}く^は仏^{ぶつ}法^{ぽう}を^は用^{もち}ひ^さる。これ^を唯^{ただ}一^{いつ}不^ふ二^にの^{しや}社^{しゃ}と^も又^{また}友^{とも}部^ぶと^りて^は
 本^{ほん}化^けの^は佛^{ぶつ}を^は没^{ぼつ}け^し。常^{じやう}に^は法^{ぽう}施^せを^なし^け。後^ご尼^に奉^{ほう}仕^し傳^{でん}ま^り。こ^のま^は既^{しか}戸^こ
 皇^{かう}子^し佛^{ぶつ}法^{ぽう}弘^{こう}通^{つう}し^る。ま^はより^は以^も来^{らい}我^{われ}國^{こく}の^に人^{ひと}を^は崇^{たか}ま^へふ^にま^はより^は神^{かみ}と
 以^もとも^は國^{くに}の^に習^{じゆ}俗^{じやく}人^{ひと}の^に手^て向^{むか}ふ^に受^うけ^らる。和^わ光^{こう}同^{どう}慶^{けい}ま^しく^て。垂^{すい}迹^{じやく}の^に仏^{ぶつ}陀^だを^は
 かり^まひ^ぬ。此^{この}年^{ねん}ま^はく^ら弘^{こう}法^{ぽう}傳^{でん}教^{けう}の^に兩^{りゆう}大^{たい}師^し建^{けん}ま^り。ま^はり^は正^{せい}なる^に。此^{この}に^は神^{かみ}も
 り^のこ^の後^ごより^は。友^{とも}部^ぶの^に社^{しゃ}と^なり。本^{ほん}宮^{みやう}澄^{じやう}誠^{じやう}殿^{てん}を^はり^て。跡^{あと}陀^だと^なり^し。新^{しん}宮^{みやう}
 之^{この}の^に末^{まつ}社^{しゃ}ま^はり^し。至^{いた}る^に。夫^{つま}の^に在^あり^し。と^もふ^に關^{かん}ら^れ。足^{あし}を^は載^{のり}せ^し。且^{かつ}鏡^{かがみ}
 照^{てう}天^{てん}姫^{ひめ}と^も熊^{くま}野^のま^はり^し。着^きる^に。女^めの^に身^みを^はり^て。と^もふ^に東^{とう}の^に果^{くわ}より^は南^{なん}海^{かい}
 の^に熊^{くま}野^のま^はり^し。と^もふ^に容^{よう}易^いく^らぬ^に。旅^{たび}は^は病^{びやう}ま^はり^し。夫^{つま}を^は優^{ゆう}恤^{しよ}の^に車^{くるま}を^は牽^ひり^て

身^みゆ^りの^に不^ふ思^し議^ぎも^も怪^{あや}し^め。足^{あし}平^{へい}く^に熊^{くま}野^の持^ぢ現^{げん}の^に推^{おし}瀆^{じやく}と^も祝^{いのち}世^よま^りの
 冥^{みやう}助^{すけ}も^も旅^{たび}客^{きやく}照^{てう}天^{てん}の^に旁^{わう}小^{せう}伐^{はつ}り^し。車^{くるま}を^はめ^け牽^ひら^り。爾^{しか}る^にの^にし^し。と^もふ^に身^み
 主^{ぬし}な^りぬ^に。艱^{あや}苦^く難^{なん}く^らぬ^に。き^は方^{かた}を^はり^し。身^み心^{しん}も^も小^{せう}勞^{らう}れ^し。身^みと^も小^{せう}嶮^{けん}岨^{じん}なる^に湯^ゆの
 峯^{かみ}ま^はり^し。車^{くるま}を^はり^し。道^{みち}も^もな^り。と^もふ^に上^{のう}へ^にと^もふ^にを^はり^し。徒^たふ
 山^{さん}上^{じやう}入^に望^{ぼう}み^て。才^{さい}ま^はり^し。此^{この}當^{たう}射^{しや}湯^{たう}峯^{かみ}に^は登^{のぼ}山^{さん}する^に。と^もふ^に傍^{わう}の^に五^ご六^{ろく}人^{にん}
 ら^し連^{れん}く^ら。只^{ただ}今^{いま}此^{この}に^は身^みの^にし^し。小^{せう}栗^{りつ}容^{よう}貌^{ぼう}の^に怪^{あや}し^め。と^もふ^に不^ふ可^か言^{げん}は^はく^ら。
 止^とま^り。首^{くび}小^{せう}神^{しん}は^は木^きれ^を流^{なが}す^に。と^もふ^に照^{てう}天^{てん}の^に對^{たい}ひ^し。此^{この}饑^{けう}鬼^き病^{びやう}を^は流^{なが}す^に。
 乃^{すなは}ち^は常^{じやう}阿^あ上^{じやう}人^{にん}に^は因^{いん}縁^{えん}あり^し。と^もふ^に奈^な何^げなる^に。と^もふ^に世^よに^は類^{るい}なる^に。
 病^{びやう}う^らむ^に。と^もふ^に照^{てう}天^{てん}姫^{ひめ}と^も方^{かた}を^はり^し。哀^{あは}れ^し。と^もふ^に伏^{ふく}せ^し。嘆^{なげ}か^らか^らら
 涙^{なみだ}を^はり^し。と^もふ^に東^{とう}方^{かた}の^にの^に。と^もふ^に奴^{やつ}家^けを^はり^し。と^もふ^に不^ふ圖^と
 此^{この}惡^{あく}き^は病^{びやう}を^は真^ま斯^し徒^たる^に。と^もふ^に貌^{ぼう}な^りぬ^に。常^{じやう}阿^あ上^{じやう}人^{にん}に^は由^ゆ緒^{じゆ}を^はり^し。と^もふ^に

く
 屈しもせど山川江海を越えり。夫の
 みよ苦身をさる。形ひ少なる貞節と忝
 なくも控況の汝が赤心と之が感愛
 あつて助せり。病苦次第ひびきせり。我
 我として神意を生きたし。たすかえん助を
 りととれ。忠孝の志なき鳥兒老まれば。
 その積善の餘慶あて沈病はふ

快然せん。浴室かきあはるる。

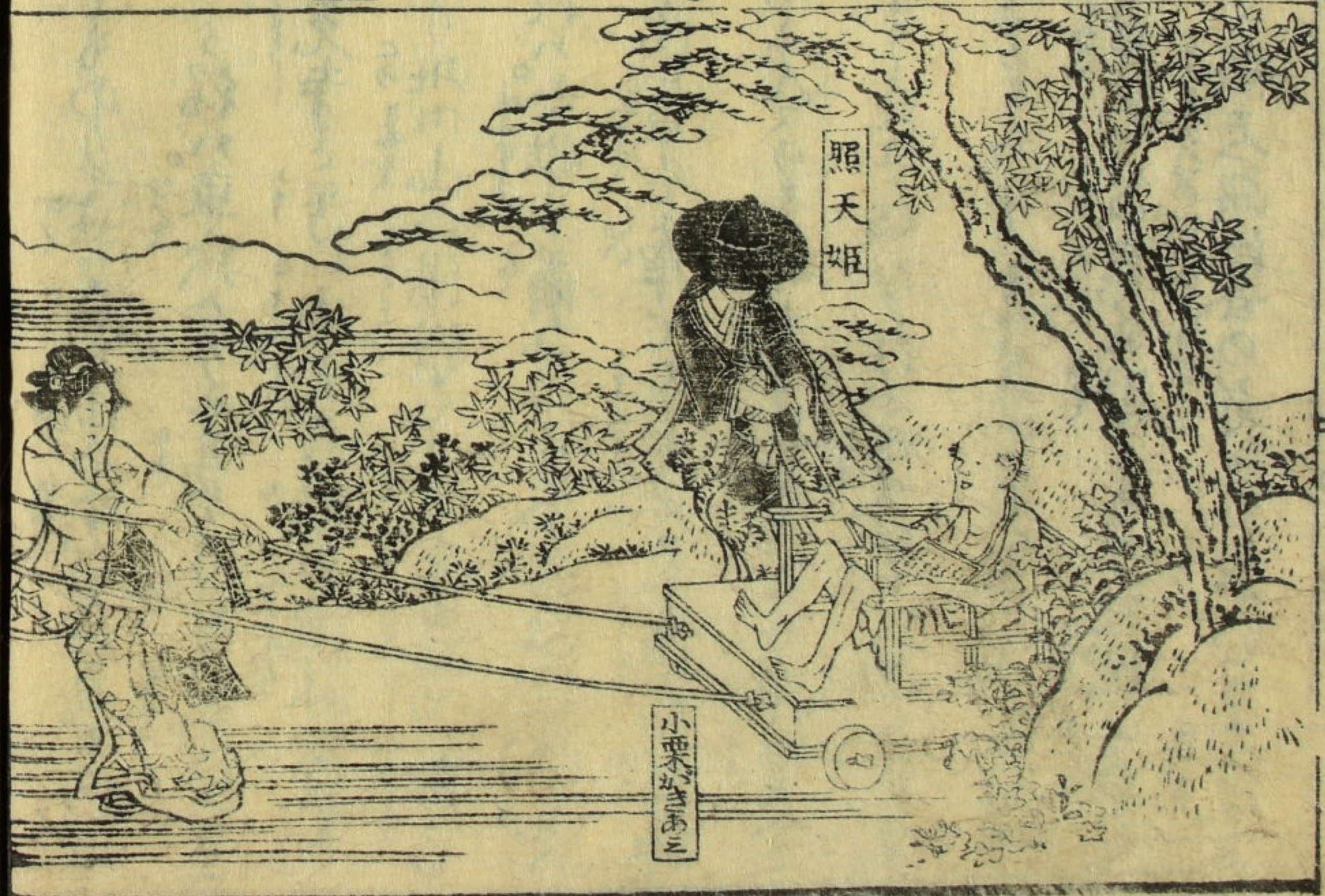
中(は)はく

小栗餓鬼病と成り
 熊野奉宮の湯も湯治
 せんとして昔墓の驛路を過

万長が家の娼妓も後世を助
 らんと小栗が舟中行車と
 牽の圖

▲午のとき

時刻を移さず。障りもあへん。前刻の
 傍流助を車を助け牽く。舟中
 控況の方便を。宜し声のみ耳をこふ。
 響音の峯の松風も夏森のさざめく。元
 醒し。あし病の次第も。夫の側へ
 偶々。照天の睡醒。右神勅の授
 の有る。信心。信心。信心。感愛の
 涙も袂を濡す。此上のゆるり疑ひゆる



惑るん。さきと云はく小車の総とにるに甲斐もまた女もがらも念力の強きの
まろく丈夫も及ぶぬ巖や松が根も厭つて車を牽かると苦ろく苦ろ小攀
ゆる。此北方の則足温泉の湧めて金佛の薬師あり。そのる像廿二の穴
あり。其穴より温泉湧出て諸病を治するや万や一も差ひはこれ神
方便の至妙なり。照天の夫が抱きさ師のる軀より出る温泉を灌ぎ
かくれた不思議中の用牙爛はじ処瘡と好り膿汁流て臭氣をじりお
其瘡悉く癒を結びく。臭氣失もたれた姫その靈験の新かたを感
授次の神恩が少裡小謝し。まろく世尚神力権護を加へると祈念く
急降なく。日小三回浴きとふ神明仏陀の奇特空かたは幾日も
預るふ病漸くと愈く。十日も満るとはしも醜くじ瘡愈て骨肉
昔は復し。原の小栗助平の仕るやとなりける。不思議といふも餘あり。

助平。さきらめもいらと照天の存びたさなるは足観世音の冥助と
慈野は現の神力と。且と常阿上人の道徳ありありのこと。夫婦共ともお
慈世三山へ順れ。まろく照天の守おき。れ観世音と拜し。まろくまろく
東國の方を伏拜み常阿上人の恩を謝し。後助重照天おひりひ。まろく
仏神の助よると斯平愈を做とらんと。おんや信の介保もく。山へ獄え
川を渡るといと遠れ武者よりしてとるぐと。紀伊國なる果お悪かろも
到着しとをぼく。此恩いつる忘はべきと懇みれをのぶねが姫をさすく
いふ。この思ひもかけぬらろく。夫人の妻にして。夫が天と仕つる。まろく
かろぬことぞじされ。夫のたにあら。まろく肉替に。まろくまろく
厭ひしと。まろく長途の旅を預ると。まろく仏神王法の三恩と殿の洪福を
まろく小恙かたをほつれ。まろく奴家か力も及らんやと。おのが艱苦をせし

こと此も誇りど謙りのことなり母は人れ助主妻の如くこ我々今ふ
いふぬ事ながら千幸万苦只方とせぬ志気は精とせぬ憐れも優恤
感謝の涙も咽びるり夫婦の間に終あはれいともいひなき好速なり
斯て小栗助を病まると愈へる今もや一日も早く宿志を成とせん
ことおのり人と東國に居る即僕亦且と小を所が音同もなれぬ敵の中へ
まぬのみ行へと思ふはなれん幸なれ今暫く人の勅諭と付ん
とて熊野山の麓に如くごりの家と宮み夫婦とれ居りぬそのうちも
日毎持現を奉る神の加護を祈りて

○此則も熊野山の事記をばれ其のの長々れが本文又讀の妨
なき載と小栗靈湯めて全快をばれ一件既は満備とまら今
幼童の爲に茲に熊野持現の畧縁記を述く神明の徳を知しむ

こと此の如し。

- 熊野権現 牟婁郡社領千石 △祭神三座 △伊弉並尊 △事解
男神 △速玉男神 神武天皇五十八年小出現し伊弉冊尊の
岳跡なりと云云本宮の崇お神天皇の十六年小始て建立したる
新宮の景行天皇五十九年建立あり耶智と龜山院文應年中小
建立ありふとぞ是を熊野三所持現と崇おなり △熊野権現
證滅殿 本地阿弥陀 △西所持現 本地薬師 觀音 △新宮と云
△若一王子 本地施無畏大士 △飛瀧権現 本地千手觀音

○右四件ハ習合の説なり。
凡熊野権現の事ハ旧事記古事記日本記纂疏神名帳その他
雜書ニ記とて區々一定ノカビ諸説長文也。容易

神戶氏藏書記

かゝる福がごとく小挙おびと退のりひと畏うこくも其要その以す老く少く終つ和光わこうの影かげ
 仰あやげらひよく高たかく永世えいせい神徳かみとくを失うはるはを速はやく而しか已ます
 ○古いにしへ天子てんし熊野山くまのやま御幸ごきよのり平城へいじやう天皇てんかうと始はじめとと光山院ひくわん一度いちど
 白川院しらかわのいん五度ごど堀河院ほりがわのいん一度いちど鳥羽院とりづるのいん八度やちど後白川院ごしらかわのいん三度さんど代々たいてい乃なり
 天皇てんかうとら斯かる信しんははませば神徳かみとくの新あらたなる措さて知しる人ひと

小栗外傳卷之十一畢

東山とうざん為な志しれるままひひででねんを
 神かみ子こをを中ちゆう也やんんおお恋こひひははくくは
 志しをを成なり物もの屋やのの抄しやう人ひとふふあある
 かかねねののここりり

